

米沢城跡

第2次発掘調査報告書

財団法人
山形県埋蔵文化財センター



6-2001-947-01

2001

2001
947
6

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

よね
米

ざわ
沢

じょう
城

跡

第2次発掘調査報告書

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した、米沢城跡の第2次調査の成果をまとめたものです。

米沢城跡は山形県南東部の米沢市に所在し、市街地のほぼ中央に位置しています。米沢市は、奥羽山脈や吾妻山地などの高い山々に囲まれて、独自性の強い文化を展開してきました。自然の要害を備えるこの地は、中世室町時代には伊達氏が本拠地を構え、また、江戸時代に入っては、上杉氏の城下町として栄え、さらに現在では、山形新幹線の開通や道路交通網などの整備充実によって、山形県の玄関口としての役割を担っています。

この度、県道米沢猪苗代線3・4・4窪田・諸仏線道路改良工事に含まれる道路拡張に伴い、工事に先立って米沢城跡の発掘調査を実施しました。

今回の調査では、中世伊達氏時代の溝跡や、近世二の丸東大手門周辺に位置すると思われる堀跡の一部など、当時周辺地域の中心をなした米沢城の様子を窺わせる遺構が確認され、また当時の生活の一端を示す多様な出土遺物を得ました。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先から伝えられた文化財を大切に保護するとともに、祖先の足跡を学び、子孫へと伝えていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及、学術研究、教育活動などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成13年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター
理事長 木場 清耕

例　　言

- 1 本書は、県道米沢猪苗代線3・4・4窪田・諸仏線道路改良工事に係る「米沢城跡」の発掘調査報告書である。
- 2 調査は山形県土木部米沢建設事務所の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 調査要項は下記のとおりである。
- 遺跡名　米沢城跡遺跡番号1216
　所在地　山形県米沢市丸の内一丁目
　調査主体　財団法人山形県埋蔵文化財センター
　受託期間　平成12年4月1日～平成13年3月31日
　現地調査　平成12年5月17日～平成12年7月7日
　調査担当者　調査第三課長　佐藤正俊
　主任調査研究員　氏家信行
　調査研究員　齋藤健（調査主任）
　副調査員　渋谷純子
- 4 発掘調査及び本書を作成するにあたり、山形県土木部米沢建設事務所道路計画課、東南置賜教育事務所、米沢市教育委員会等関係機関にご協力いただいた。
- 5 本書の制作・執筆は齋藤健・渋谷純子が担当し、編集は須賀井新人・多田和弘が担当し、全体については佐藤正俊が監修した。
- 6 委託業務は遺構写真実測を国際航業株式会社、理化学分析をパリノ・サーヴェイ株式会社、出土遺物保存処理を株式会社東都文化財保存研究所に委託した。
- 7 出土遺物、調査記録類は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが一括保管している。

凡　　例

- 1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は
- S K…土坑　　S D…溝跡・堀跡　　S X…性格不明遺構
　S P…ピット　　S ……石　　P ……土器・陶磁器
- 2 遺構番号は、現地調査段階での番号をそのまま報告書の番号として踏襲した。
- 3 報告書執筆基準は下記のとおりである。
- (1) 遺跡概要図・遺構配置図中の方位は磁北を示している。
(2) グリッドの南北軸はN-20°-Eを測り、5m×5mを基準に設定した。
(3) 遺構実測図は1/40～1/80他の縮図で採録し、各々スケールを付した。
(4) 遺物実測図・拓影図は原則的に1/2、1/4で採録し、各々スケールを付した。

目　　次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の立地と環境	1
III 遺構と遺物	5
1 調査の概要	5
2 主な遺構と出土遺物	5
3 その他の遺構と遺物	12
IV まとめ	12
報告書抄録	21

表

表1 土器・陶磁器観察表(1)	19
表2 土器・陶磁器観察表(2)	20
表4 木製品観察表(4)	20
表5 銭貨観察表(5)	20
表6 石製品観察表(6)	20

挿　　図

第1図 調査区概要図	2	第8図 S K30・31・32・S X17	11
第2図 遺跡位置図	2	第9図 S K44・55	13
第3図 基本層序図	3	第10図 遺物実測図(1)	14
第4図 遺構配置図	3	第11図 遺物実測図(2)	15
第5図 S D 2・3	6	第12図 遺物実測図(3)	16
第6図 S D35・45・46	7	第13図 遺物実測図(4)	17
第7図 S D48・S K 1・14	9	第14図 遺物実測図(5)	18

図　　版

図版1	25	図版2	26
-----	----	-----	----

I 調査の経緯

今回の調査は、県道米沢猪苗代線3・4・4窪田・諸仏線道路改良工事に係る緊急発掘調査である。調査にあたり、山形県教育文化財課と米沢建設事務所が協議を重ね、米沢建設事務所より委託を受けた財団法人山形県埋蔵文化財センターが主体となり、事業により掘削を受ける部分に対し、記録保存を目的とした発掘調査を実施した。

発掘調査は平成12年5月17日から7月7日までの延べ51日間実施した。調査区は、南北約200m、東西約11mで、面積は2,200m²である。これをA～Dの4区に分け、それぞれ調査区北端から北側工事用通路までをA区、北側工事用通路と南側工事用通路に挟まれた部分のうち北側をB区、南側をC区、南側工事用通路から調査区南端までをD区とした。

調査の進行は次の通りである。5月17日に機材搬入、環境整備等を行い、C・D区表土除去後、面整理・遺構精査・記録作業を開始する。6月19日にA・B区表土除去を開始し、A・B区域の面整理・遺構精査・記録作業を開始する。7月6日に関係者を対象に調査説明会を実施した。7月7日 機材搬出し、現地調査を終了した。

II 遺跡の立地と環境

米沢城跡は、米沢市街地の約四分の一を占める遺跡であり、本丸を中心として三の丸の一部を含めた東西約600m、南北約560m、面積約336,600m²の範囲が遺跡に登録されている。

地理的には米沢市街のほぼ中央に位置し、標高約289mを測る。米沢市は南を吾妻山地と東鉢山地、東を奥羽山脈系の豪士山地と番城山地、北を戸戸山地と白鷹火山地、西を玉丘丘陵と篠野山地に囲まれた米沢盆地の南部にあり、三方を山に囲まれている。

近世の地誌『米沢事跡考』によると、米沢城は文治5年（1189）の奥羽合戦で長井荘・寒河江荘を得た大江氏が暦仁元年（1238）に築城したといふ。

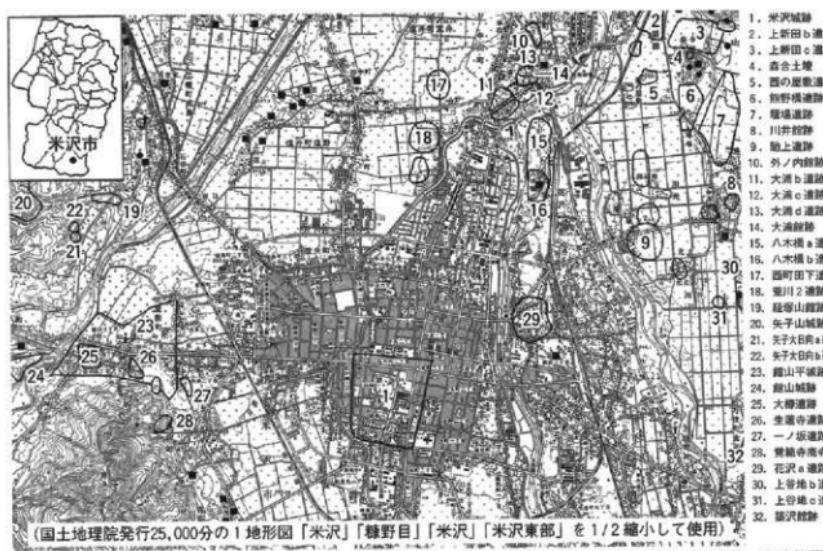
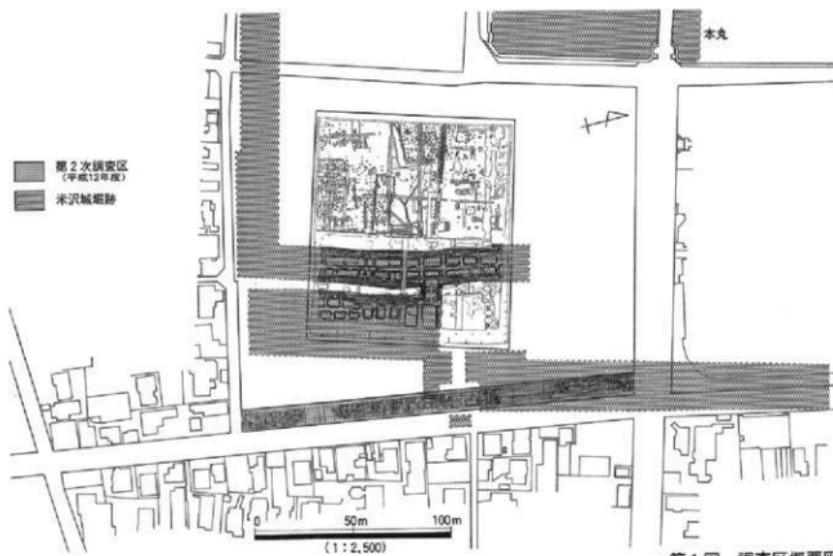
康暦2年（天授6年）（1380）、長井荘は伊達宗達により押領された。伊達氏は奥羽合戦で伊達郡を得た関東御家人である。天文18年（1549）頃晴宗は本拠地を米沢に移した。当時の米沢については史料からある程度様子が窺える。天正19年（1591）政宗は岩出山に転封になる。

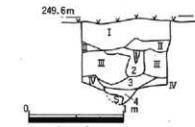
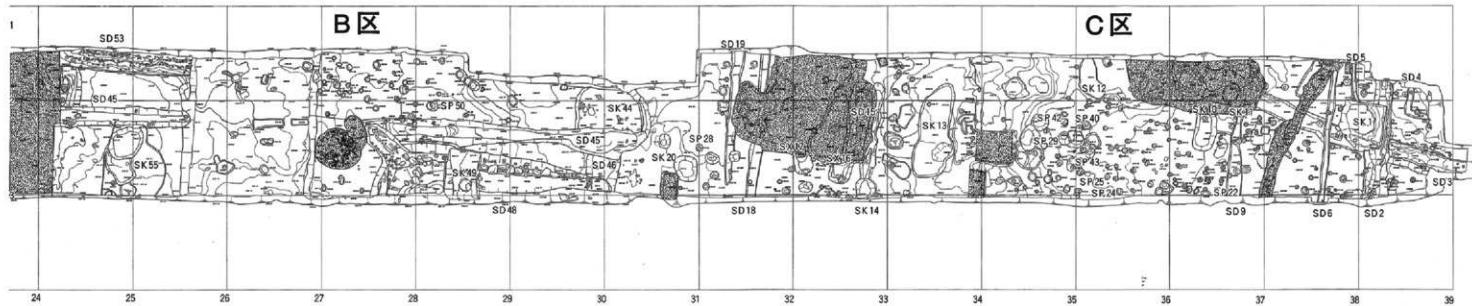
それに代わり、米沢は蒲生氏郷領となる。氏郷は会津に本拠地を置き、米沢は家臣の蒲生郷安に与えられた。しかし蒲生氏は慶長3年（1598）宇都宮18万石に減封となる。

その後上杉景勝が会津120万石を得て入部し、米沢城は直江兼続の居城となったが、景勝は関ヶ原の戦いで西軍に属し、30万石に減封され、米沢城に景勝が移り米沢藩が成立した。『上杉家記』によると景勝入府後直ちに二の丸が普請され、慶長年間には三の丸も完成したといふ。

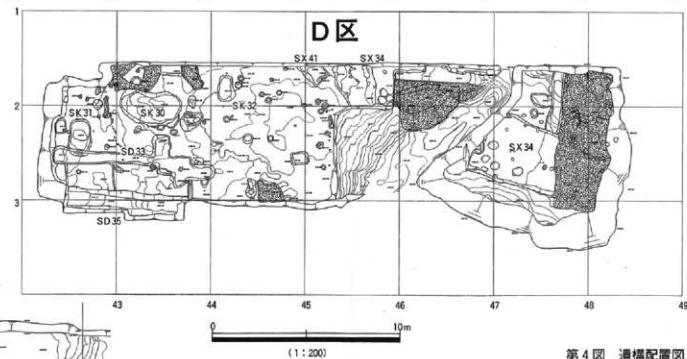
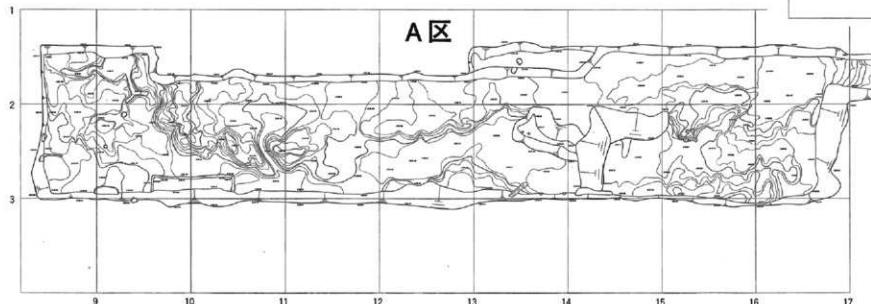
寛文4年（1664）米沢藩が15万石に削封になり削封地から家臣が流入し、城下の拡大が見られる。また、郊外の東原・南原などに「原方衆」と呼ばれた半士半農の下級家臣を配置した。

米沢藩は明治維新とともに消滅し、明治4年（1871）には二の丸の土壘、堀の取り壊しが行われた。城下は、現在も当時の町割りを多く残し市街地が営まれている。

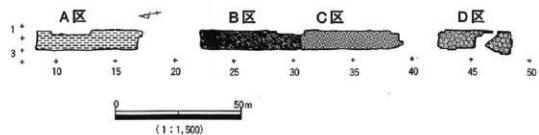




第3図 基本層序図



第4図 道構配置図



III 遺構と遺物

1 調査の概要

A区は地表下約2m重機で掘削しても旧米沢工業高校（以下米工）の旧校舎廃材が多数出土した。また、掘削時に西壁面が崩落したため、それ以上の掘削は諦め、手掘で数十cm下げたが様相に変化が見られず、A区の調査は断念した。なお、A区には昭和30年代まで旧二の丸外堀が縮小しながらも防火用水池として残っていた。B区北側も大規模に攪乱を受けていたために調査を断念した。他にも、調査区全体で多くの近代以降の攪乱が存在している。遺物の出土量は全体に少なく、整理箱で24箱であり、遺物が出土しなかった遺構もある。

基本層序（第3図）は場所により差異が見られるが、基本的に4層から成る。I層は現代の整地層で、コンクリート片などを含む。II層は比較的薄い。所によりI層に攪乱され、存在しない所もある。III層は厚い整地層である。II、III層は土質的に近いことから、さほど時間差を置かずに整地されたものと見られ、近代の整地層と見られる。IV層は薄い整地層で、近世の遺構は概ねこの層を切ることから、近世初期に二の丸、三の丸造成時に盛られたものと見られる。C区南側にはほぼ分布範囲が限られていた。

以下に主な遺構と出土遺物の概略を述べるが、遺物については表に詳細を記した。

2 主な遺構と出土遺物

S D 2（第5図）

位置・規模・形態 C区38-1～3グリッド（以下G）に位置する。SD3を切り、SK1に切られる。長さ約6.2m、幅は1～1.2mである。深さは0.56mである。東側は標高249.46m、西側は249.33mあり、西側が若干低くなっている。下層は崩落土で、上層には焼土を粒状に含む。西側からは径20～30cmほどの礫がまとまって出土している。

出土遺物 瓦質土器2点、磁器2点のほか箸が8点出土した。

時期 重複関係や出土遺物から16世紀末から17世紀初頭の遺構である。

S D 3（第5図）

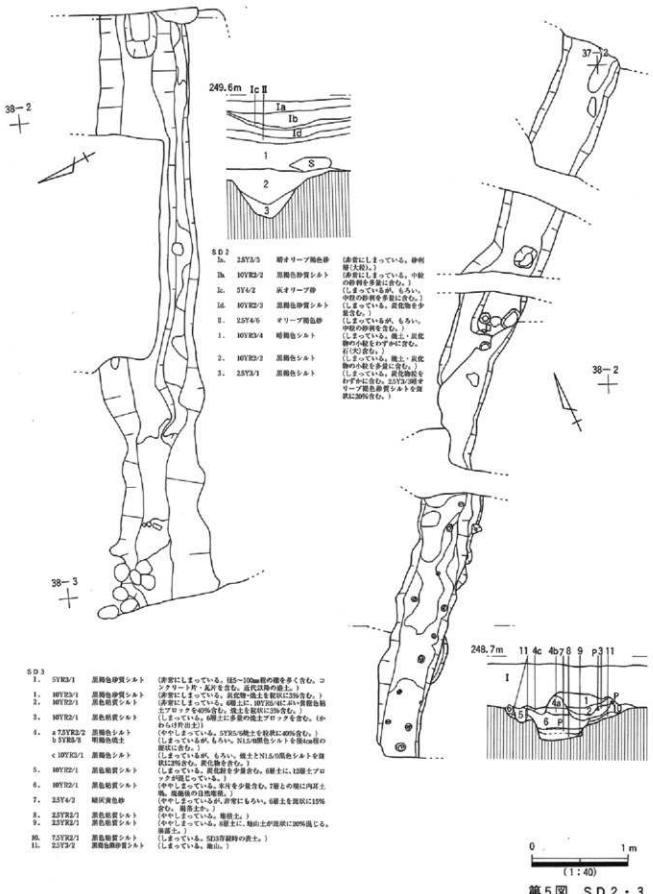
位置・規模・形態 C区36～39-1、2Gに位置し、南側は攪乱で、SD2、6、7とSK1に切られている。長さ約11m、幅は1～1.4m、深さ0.54mの溝である。北側は標高249.26m、南側は標高249.22mあり、南側が若干低い。土層上部に焼土が大量に検出された。

出土遺物 遺構内からかわらけ5点、瓦質土器1点、陶器2点、磁器2点、貨幣9点、木製碗が2点、用途不明木製品が1点、焼土層の直上から漆塗容器が出土した。また、周囲からは同時期とみられる土師質土器3点、磁器1点も出土している。遺物の年代は概ね16世紀代に比定される。底から永楽通宝8枚が縫錢の状態で出土した。

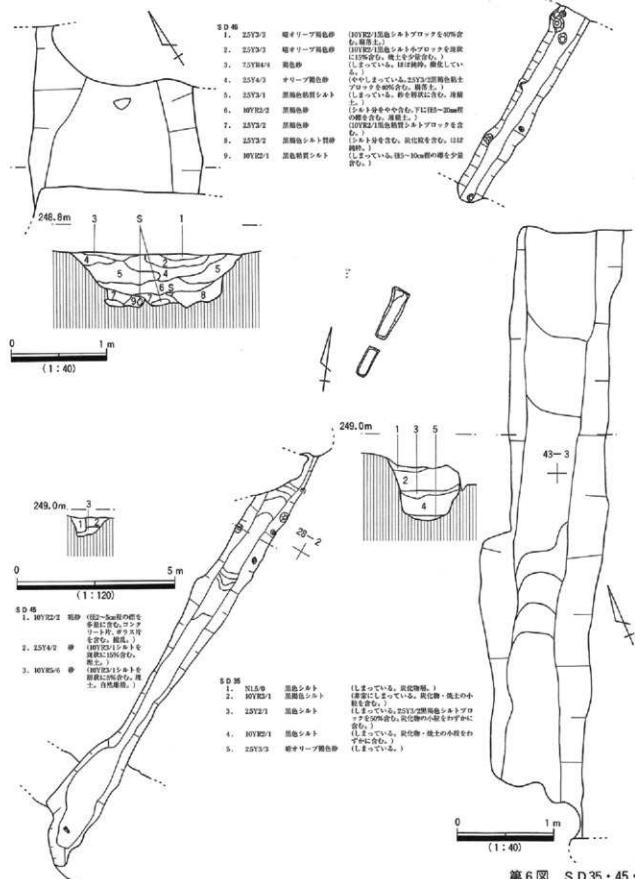
時期 遺物と遺構の年代はほぼ一致するとみられ、16世紀後半に廃絶したものとみられる。

S D 35（第6図）

位置・規模・形態 D区42、43-2、3Gに位置する。C区では延長部分が検出されないた



- 6 -



第6図 SD35・45・46

め、工事用搬入口の辺りで屈曲するか消滅しているとみられる。断面はU字状である。長さは約6m、幅は約1.2m、深さは0.4mある。土層を観察すると、崩落土が主体を占めている。

出土遺物 燃焼窓の蓋と見られる土製品1点、磁器が1点である。

時期 近世の区画溝とみられる。廃絶時は廢城後の明治4年(1871)頃とみられる。

S D45 (第6図)

位置・規模・形態 B区24~30-2Gに位置する。北側は擾乱され、南側ではSK44を切って消滅している。長さは約31.2m、幅は0.6~1.2m、深さ0.2mのほぼ直線で、断面はV字状の薬研堀である。北側は標高248.92m、南側は249.50mあり、北側が若干低くなっている。

出土遺物 北端から石皿状の石製品が1点のみ出土した。

時期 時期を特定できる遺物がないが、他の遺構との重複具合から16世紀末以降17世紀前半、景勝入府から三の丸造成までの極めて短い期間に造営、廃絶された可能性が強い。

S D46 (第6図)

位置・規模・形態 B区29、30-2Gに位置し、西側はSD48で、東側はSD45、SK44に切られている。幅は1.8m、深さ0.56mある。土層を観察すると、半分ほど堆積土である。

出土遺物 陶器1点と磁器が2点出土している。

時期 遺物から16世紀末頃に廃絶したものとみられる。

S D48 (第7図)

位置・規模・形態 B区27~29-2Gに位置する。西側が調査区外であるために全体は調査できなかった。掘り方の外側が12.6m、杭列の内側が10.4mの長さが、幅は2.6m、深さ0.46mある。岸には護岸のために杭が垂直のものと斜めのものが交互に隙間無く打ち込まれ、その上に板が渡されている。さらに上には短径20cm長径40cm程の石材が積み上げられていた。絵図面の位置や大きさから近世二の丸外堀で大手門の馬出の南側の堀とみられる。明治4年に二の丸の土壠と堀が破却され埋め立てられた時、SD48も埋め立てられたとみられる。その後に竹筒製の水道や便所桶SK49が設けられた。土層を観察すると、SD全体を掘削後、9層が自然崩落し、杭などの護岸施設を設置しながら7、8層で埋め戻した。機能時は頻繁に浚渫が行われていたとみられる。廃絶時に上部の石組が一部崩されて、1~6層で埋められたとみられる。また、北東部に張出が見られる。検出時には同一遺構と見られたが、掘り下げていくと張出部の杭列がSD48の杭列、石積みを壊し、延長部では明らかにSD48の底面より上層に張出部の杭が存在していたことから、SD48廃絶後に張出部分は設置されたと見られる。

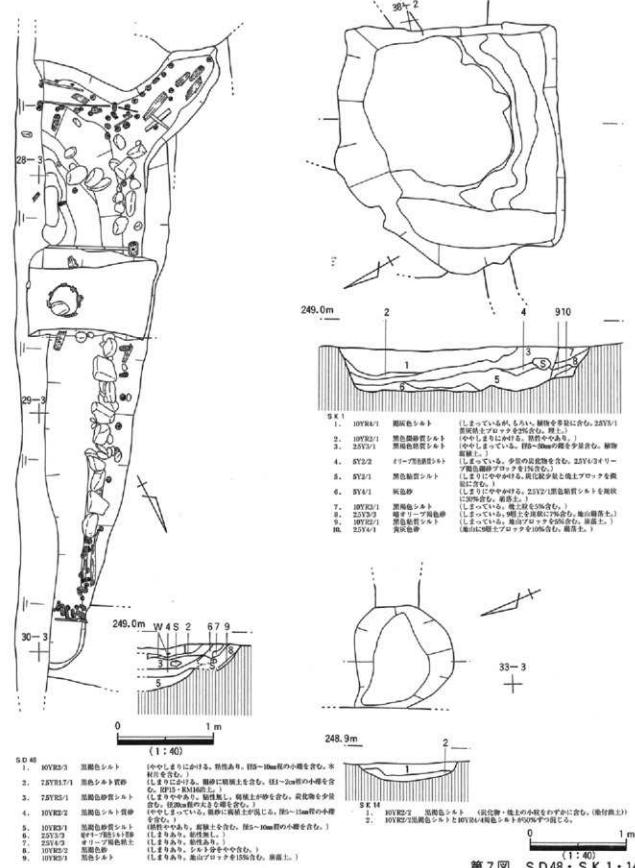
出土遺物 かわらけ7点、土師質の火鉢3点、陶器6点、磁器8点、木製品4点出土した。

遺物の年代は概ね19世紀代のものとみられる。

時期 延長年間(1596~1615)末には三の丸外堀も完成したことから、存続年代は17世紀初頭~1871年までとみられる。

S K1 (第7図)

位置・規模・形態 37、38-2Gに位置し、SD2、3、5を切る。2.36×2.5m深さ0.46mの不定方形の土坑である。比較的の時期が近いと見られる。土層は、6層は掘削直後の自然崩落



第7図 SD48・SK1・14

で、その後人為的に埋め戻されたとみられる。7~10層はSD2の堆積層である。

出土遺物 かわらけ1点、土師質の焰烙、焼塙壺各1点、瓦質の風炉と陶器の皿が出土している。出土遺物は被熱しているものが多い。焼塙壺は手づくねで無銘である。

時期 焼塙壺(11~6)は17世紀前半の特徴を持つため、概ねその時期と見られる。

S K14 (第7図)

位置・規模・形態 C区32-2、3Gに位置し、径は約1mで、深さは0.2mと浅い。土層を観察すると2層は掘削直後の自然崩落で、1層は人為的埋め戻しとみられる。

出土遺物 磁器皿が1点出土している。

S K30 (第8図)

位置・規模・形態 D区43-1、2Gに位置する。東側が僅かに攪乱されている。3.2×1.7m、深さ0.9m程の規模で、平面はそら豆型をしている。壁面はほぼ垂直に落ち込み、底面は平らである。土層は、9~11層は土坑掘削直後の自然崩落層、1~8層は堆積層とみられる。絵図から、三の丸武家屋敷地内に入ると見られるため、屋敷内のゴミ投棄用土坑と見られる。

出土遺物 土師質土器2点と陶器2点、磁器3点、石製品1点、木製品5点、錢貨5点。

時期 近世

S K31 (第8図)

位置・規模・形態 D区42-2Gに位置する。SD33に西端を僅かに切られている。1×1.95mの規模で、深さ0.52mある。平面形は隅丸方形を呈し、断面はほぼ垂直に落ち込み、底面は平らであった。土層を観察すると、所々に自然崩落土層を挿みながら堆積土が重なっている。

出土遺物 土師質土器と陶器の破片が1片ずつ出土している。陶器片は被熱している。

S K32 (第8図)

位置・規模・形態 D区44-2Gに位置する。0.75×1.35m、深さ0.18m。土層を観察すると人為的に埋め戻されたようだ。

出土遺物 かわらけ2点、土製品1点、陶器3点が出土している。陶器は絵唐津、志野の他、米沢市内の戸長里窯産の鉢鉢片も出土している。概ね下限は17世紀前半にまとまる。

時期 遺物から17世紀前半であると見られる。

S K44 (第9図)

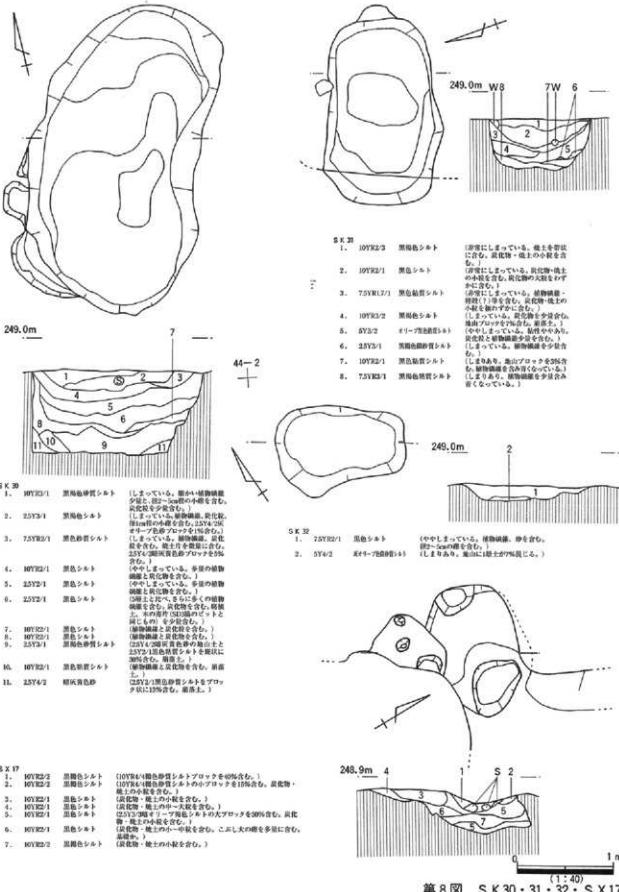
位置・規模・形態 B区29、30-1、2Gに位置する。東側はSD45に切られている。またSD46を切っている。直径は約4m、深さ0.72mではほぼ円形をしていると見られる。土坑底部には數本杭が打ち込まれている。土層は自然堆積はほとんど見られず、崩落土であることから、掘削された後比較的短期間の内に埋め戻されたと見られ、ゴミなどの投棄坑であると思われる。

出土遺物 かわらけ1点、内耳錫片2点、焰烙1点、瓦質土器2点、陶器2点、磁器1点、硯1点が出土している。11~23は全体に被熱し、焰烙の蓋である可能性が高い。

時期 遺物から16世紀末から17世紀初頭にかけてのかなり短い期間存続したのであろう。

S X17 (第8図)

位置・規模・形態 C区32-2Gに位置し、東側は攪乱により削平されている。径0.95m、



第8図 SK30・31・32・SX17

深さ0.56m程である。上層には礫を多く含む層があり、全体に焼土を含む層が多い。

出土遺物 かわらけが1点出土している。

S X55 (第9図)

位置・規模・形態 B区25、26-2 Gに位置する。東側はS D45に擾乱され、西側は調査区外である。3.4×3.7m、深さ0.2m程の不定形。検出時は大型の土坑と見られたが、実際に掘り下げる非常に浅く、落ち込みと見られる。土層断面から人為的な埋め戻しと見られる。

出土遺物 瓦質土器と陶器2点が出土。

時期 出土遺物の年代からは、16世紀末～17世紀初頭だが、流れ込みである可能性もある。

3 その他の遺構と遺物

遺構は挿図掲載しなかったが、図化した遺物がある遺構について以下に概略を述べる。

S D 4 (第4図)

位置・規模・形態 C区38-1、2 Gに位置し、L字型に屈曲している。東西軸南北軸とも約1.4m、幅は0.3m、深さ0.15mである。黒色のシルトが堆積している。

出土遺物 陶器1点、磁器2点である。遺物の年代は18世紀以降とみられる。

時期 近世中期以降の遺構とみられる。

S X34 (第4図)

位置・規模・形態 D区45-48-1、2 Gに位置する。長さ12m以上、深さ0.4mあり、東西とも調査区外に伸びている。全体的に黒褐色粘質シルトの自然堆積層で形成されているが、南側は擾乱されている。中央部分もコンクリート製の建物基礎により擾乱されている。遺構全体も近代以降の遺物の混入が見られた。平成11年度の市教育委員会の調査で、周囲でこの遺構の延長とみられる遺構が検出された。市教委では池跡と推定している。

出土遺物 陶器15点、磁器4点、瓦質土器2点、土師質土器2点、土製品1点、石鉢1点、銭貨1点、木製品4点が出土した。

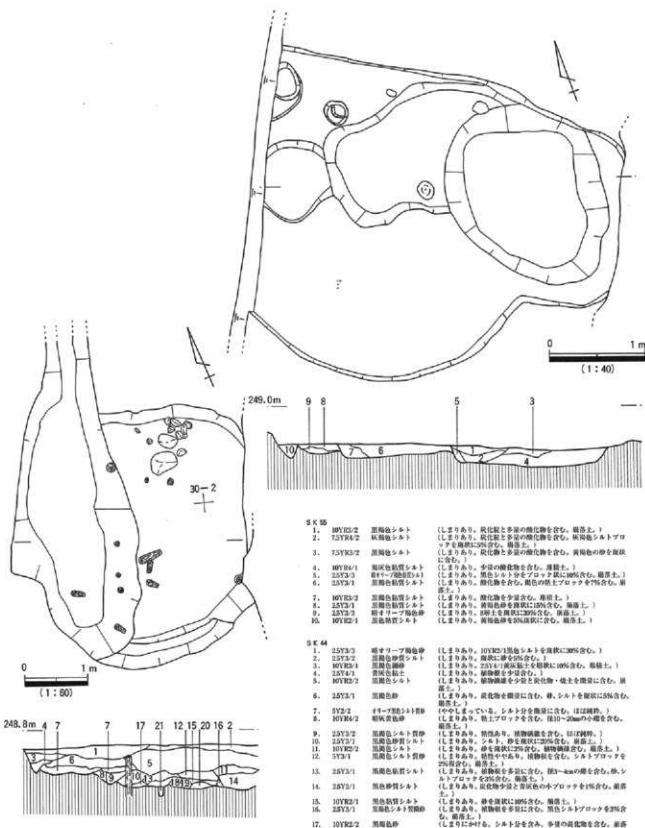
時期 遺物の年代から19世紀後半ぐらいに廃絶したとみられる。

IV まとめ

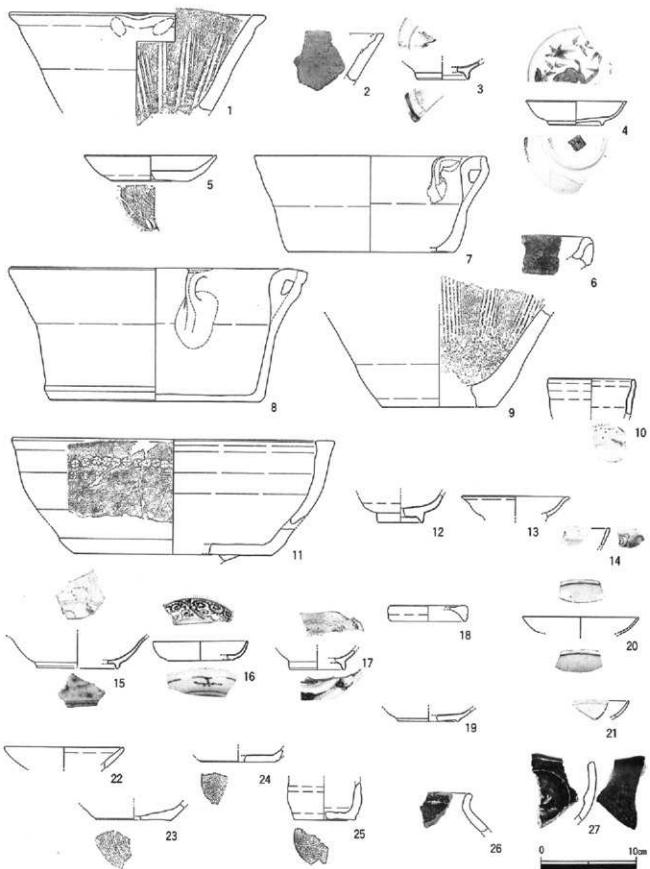
調査区は市街地の中心部であり、決して遺構の遺存状況は良好とは言えない状況であった。それでも今回の調査の結果得るものは多かった。紙幅が足りないため以下簡略に述べる。

①今回の調査でも、16世紀を遡る遺構遺物は検出されず、長井氏の関連は窺えなかった。②遺構遺物は伊達期、蒲生・直江期、上杉期の3期があり、それぞれ溝跡の軸線の傾きが異なる。③上杉以前の遺構は溝が多く、上杉期は屋敷地内の土坑も目立つ。

上杉期以前の米沢の様子は詳細は不明であるが、伊達期にはある程度城下町の整備が行われていたことが知られている。蒲生・直江期にはそれが基本的に踏襲され、小規模な変更のみが行われたことであろう。上杉氏が入府すると、慶長年間に城下の大規模な改変が行われている。

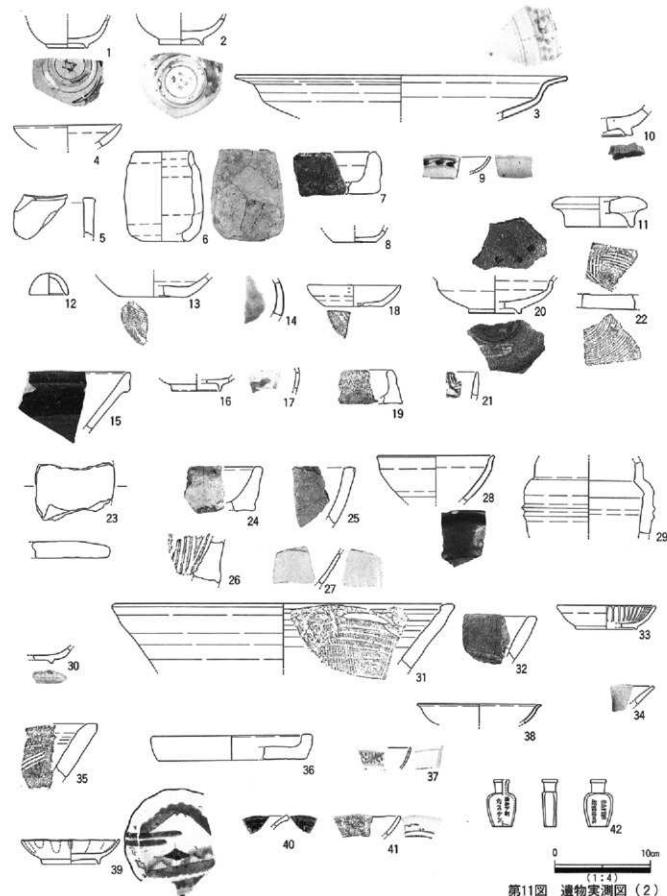


第9図 S K 44・55



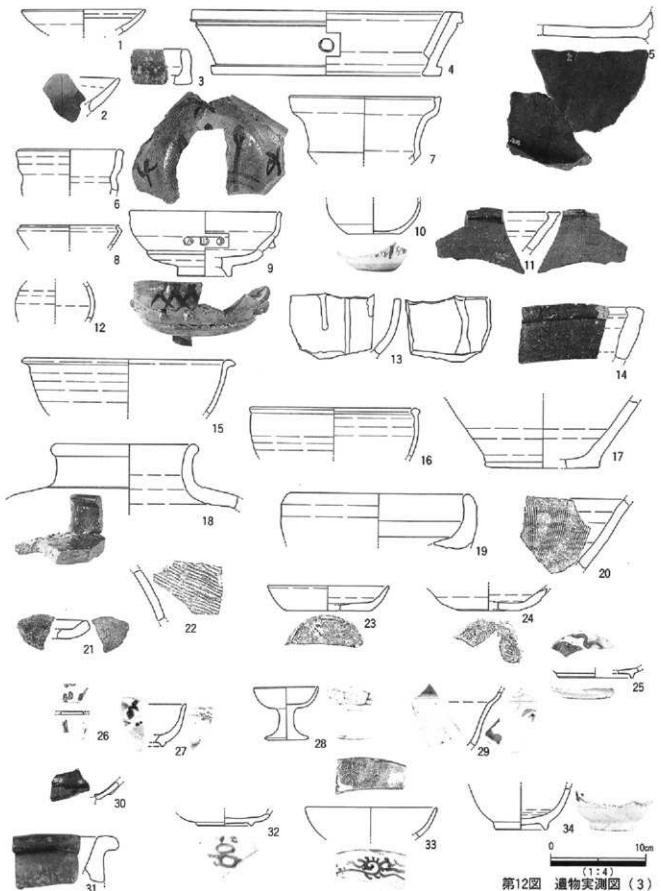
第10図 遺物実測図(1)

- 14 -



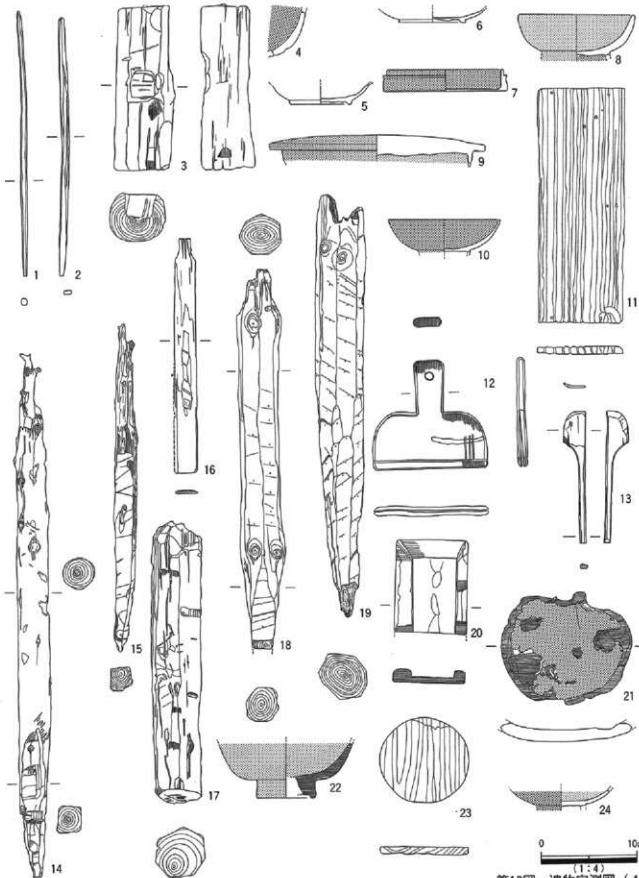
第11図 遺物実測図(2)

- 15 -



第12図 遺物実測図(3)

- 16 -



第13図 遺物実測図(4)

- 17 -

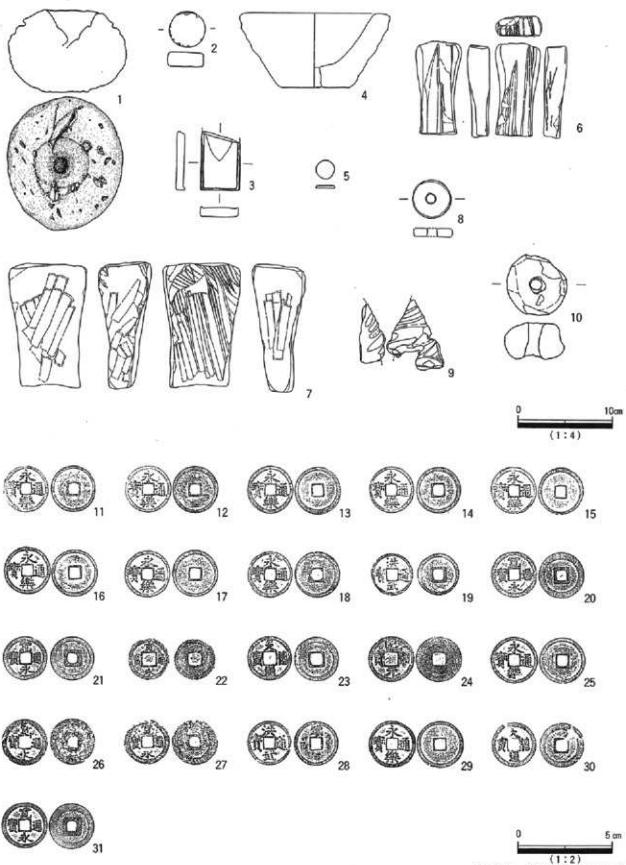


表1 土器・陶磁器類表 (1)

番号	出土場所	種類	口径	底径	器高	器厚	胎色	制作地	備考
10-1	S D 2	瓦片	206	226	14	13	灰白色	内面刷毛	
10-2	S D 2	瓦片	206	226	11	13	灰白色	内面刷毛。口縁内側削落	
10-3	S D 2	瓦片	106	57	26	2	灰白色	中国	内面に花紋。底部に孔あり不明
10-4	S D 2	瓦片	106	57	16	5	灰白色	中国	紋様なし
10-5	S D 3	土器質土器	かわらけ	(138)	(76)	27	6	灰白色	
10-6	S D 3	土器質土器	内面刷毛	290	234	14	15	灰白色	灰白色。外縁に付着物
10-7	S D 3	土器質土器	内面刷毛	244	175	101	10	灰白色	外縁に付着物。内面に付着物
10-8	S D 3	土器質土器	内面刷毛	(120)	(100)	(18)	16	灰白色	外縁に付着物。
10-9	S D 3	陶器	内面刷毛	(84)		6	白色	赤陶大窯Ⅱ期後半	内面に付着物。底部に孔あり
10-10	S D 3	陶器	内面刷毛	(340)	(205)	13	13	灰白色	外縁に付着物。底部に印
10-11	S D 3	瓦片	火鉢	内面刷毛	(46)	(30)	6	白色	内面にガラス。底部に印
10-12	S D 3	白磁	碗	内面刷毛	(112)		3	白色	中国
10-13	S D 3	白磁	碗	内面刷毛	(126)		2	白色	中国
10-14	S D 3	白磁	碗	内面刷毛	(86)	(55)	3	白色	灰白色。内縁に植物紋有
10-15	S D 3	白磁	碗	内面刷毛	(99)	(60)	4	白色	灰白色。内縁に植物紋有
10-16	S D 3	白磁	碗	内面刷毛	(56)	(32)	5	白色	灰白色。内縁に植物紋有
10-17	S D 3	白磁	碗	内面刷毛	(56)	(32)	5	白色	灰白色。内縁に植物紋有
10-18	S D 3	土器質土器	蓋	内面刷毛	(62)	(12)	4	白褐色	赤陶大窯Ⅱ期後半
10-19	S D 3	陶器	碗	内面刷毛	(120)		2	白色	中国
10-20	S D 3	陶器	碗	内面刷毛	(120)		2	灰白色	中国
10-21	S D 3	陶器	碗	内面刷毛	(120)		2	灰白色	中国
10-22	S D 3	土器質土器	かわらけ	(126)		6	灰白色	内面刷毛付着物	
10-23	S D 3	土器質土器	かわらけ	(800)	(13)	6	灰白色	内面刷毛付着物	
10-24	S D 3	土器質土器	かわらけ	(76)	(11)	7	灰白色	内面刷毛付着物の上に金箔	
10-25	S D 3	土器質土器	かわらけ	(64)	(40)	8	灰白色	内面に金箔有	
10-26	S D 3	陶器	碗	内面刷毛	(9)	9	灰白色	灰白色	
10-27	S D 3	陶器	碗	内面刷毛	(8)	8	灰白色	灰白色	
11-1	S D 4	陶器	碗	内面刷毛	(41)	(30)	5	灰白色	肥前?
11-2	S D 4	陶器	碗	内面刷毛	(46)	(26)	5	灰白色	肥前?
11-3	S D 4	陶器	碗	内面刷毛	(28)	6	灰白色	肥前?	
11-4	S K 1	土器質土器	かわらけ	(112)		7	灰白色	手づな	
11-5	S K 1	瓦片	瓦片	内面刷毛	(55)	48	95	16	灰褐色
11-6	S K 1	瓦片	瓦片	内面刷毛	(47)	15	17	灰褐色	手づな
11-7	S K 1	瓦片	瓦片	内面刷毛	(21)	4	褐色	手づな	
11-8	S K 1	瓦片	瓦片	内面刷毛	(68)	2	白色	中国	内面刷毛
11-9	S K 1	瓦片	瓦片	内面刷毛	(100)	32	42	褐色	手づな。用通不易
11-10	S K 1	瓦片	瓦片	内面刷毛	(70)	32	42	褐色	手づな。用通不易
11-12	S K 3	土器質土器	瓦片	内面刷毛	(38)	22	55	5	褐色
11-13	S K 3	陶器	瓦片	内面刷毛	(74)	(18)	8	浅白色	手づな
11-14	S K 3	陶器	瓦片	内面刷毛	内面刷毛	6	灰白色	肥前?	
11-15	S K 3	陶器	瓦片	内面刷毛	内面刷毛	8	灰色	上部一黒物 下部一茶色	
11-16	S K 3	陶器	瓦片	内面刷毛	(3)	(10)	4	白色	中国?
11-17	S K 3	陶器	瓦片	内面刷毛	内面刷毛	4	灰白色	肥前?	外縁に付着物。
11-18	S K 2	土器質土器	かわらけ	(58)	(60)	23	5	素面	肥士。静多。静高
11-19	S K 2	土器質土器	瓦片	内面刷毛	(9)	9	褐色	肥士。静多。静高	
11-20	S K 2	陶器	瓦片	内面刷毛	(122)	(56)	34	7	灰褐色
11-21	S K 2	陶器	瓦片	内面刷毛	(122)	(56)	7	灰褐色	肥前? 創作? 内面に被物残。
11-22	S K 2	陶器	瓦片	内面刷毛	(14)	灰褐色	瓦盆の内面		
11-23	S K 4	瓦片	瓦片	内面刷毛	(47)	13	灰褐色	瓦盆の内面	
11-24	S K 4	土器質土器	瓦片	内面刷毛	(120)	(40)	6	灰褐色	肥前? 上面に指紋多
11-25	S K 4	瓦片	瓦片	内面刷毛	(120)	(40)	6	灰褐色	肥前? 上面に指紋多
11-26	S K 4	瓦片	瓦片	内面刷毛	(120)	(40)	6	灰褐色	肥前? 上面に指紋多
11-27	S K 4	瓦片	瓦片	内面刷毛	(120)	(40)	6	灰褐色	肥前? 上面に指紋多
11-28	S K 4	瓦片	瓦片	内面刷毛	(120)	(40)	6	灰褐色	肥前? 上面に指紋多
11-29	S K 13	陶器	瓦片	内面刷毛	(10)	10	灰色	瓦盆の内面	
11-30	S K 13	陶器	瓦片	内面刷毛	(15)	6	黄褐色	瓦盆の内面	
11-31	S X 5	瓦片	瓦片	内面刷毛	(36)	12	灰褐色	瓦盆の内面	
11-32	S X 5	瓦片	瓦片	内面刷毛	(101)	63	25	4	灰褐色
11-33	S X 5	瓦片	瓦片	内面刷毛	(101)	63	25	4	灰褐色
11-34	S X 5	瓦片	瓦片	内面刷毛	(101)	63	25	4	灰褐色
11-35	S K 6.14	瓦片	瓦片	内面刷毛	(166)	(156)	26	11	灰褐色
11-36	S P 49	瓦片	瓦片	内面刷毛	(2)	2	白色	中国	内一縁。另一側何学系
11-37	S P 49	陶器	瓦片	内面刷毛	(4)	4	灰色	灰陶大窯Ⅰ期	
11-38	S P 49	陶器	瓦片	内面刷毛	(104)	60	25	4	灰白色
11-39	S X 3	瓦片	瓦片	内面刷毛	(1)	5	灰褐色	瓦盆?	
11-40	-39-3	陶器	瓦片	内面刷毛	(1)	4	白色	肥前?	
11-41	S K 14	陶器	瓦片	内面刷毛	(1)	4	白色	肥前?	
11-42	S K 14	瓦片質土器	小瓶	内面刷毛	15	2	90	16	灰褐色
12-1	S X 34	瓦片質土器	小瓶	内面刷毛	(128)		6	灰褐色	灰陶大窯Ⅰ期
12-2	S X 34	瓦片質土器	小瓶	内面刷毛	(128)		8	褐色	外縁下部に縫合。内面に化粧物有

報告書抄録

表2 土器・陶磁器観察表(2)

遺物番号	出土点	縦・横	厚さ	口径	底形	高さ	縁厚	胎土色	制作地	備考
12-3 S X34 陶器	土壌	用埴	39	10	白褐色	外縁に黒褐色 上部表面有 底部から凹へ				
12-4 S X34 陶器	火鉢	(280)	68	10	白褐色	底面に黒褐色				
12-5 S X34 陶器	火鉢	(128)	11	10	白褐色	底面有				
12-6 S X34 陶器	火鉢	(104)	(63)	7	10	黄褐色?				
12-7 S X34 陶器	火鉢	不明	(156)	3	10	白褐色				
12-8 S X34 陶器	茶人式?	(100)	8	8	白褐色	唐津16C末				
12-9 S X34 陶器	鉢	(157)	(56)	69	8	灰褐色	追跡。高台陶軸。内外接縫			
12-10 S X34 陶器	土瓶	(53)	(23)	4	4	黄褐色	相手系 外縁付け。外縁下部から底部に粗筋			
12-11 S X34 陶器	壺	小甕	68	8	白褐色	粗筋				
12-12 S X34 陶器	壺	小甕	4	4	灰褐色	成馬				
12-13 S X34 陶器	壺	風呂?	8	8	灰褐色	成馬。筋に縫合				
12-14 S X34 陶器	鉢	不明	(128)	11	10	白褐色	黒褐色に内縫縫合			
12-15 S X34 陶器	鉢	(260)	5	5	白褐色	成馬	ナガコ縫			
12-16 S X34 陶器	鉢	(174)	5	5	白褐色	成馬	内縫縫合。底板。変形系			
12-17 S X34 陶器	鉢	(120)	(70)	11	10	灰褐色				
12-18 S X34 陶器	鉢	(120)	14	10	灰白色	唐津16C無手				
12-19 S P50 陶器	鉢	粗筋	(64)	51	14	灰白色	變形			
12-20 S X34 陶器	壺	壺嘴	9	9	白褐色	越前	大口目直縫			
12-21 S P58 陶器	壺	壺嘴	20	12	灰褐色	手くび。内部に特有物有				
12-22 S P58 陶器	壺	壺嘴	20	12	灰褐色	外タマ。骨質無し				
12-23 S P58 陶器	壺	壺嘴	20	12	灰褐色	内縫下部有りの上に金箔				
12-24 D 区 土器	土器	かわらけ	(64)	(92)	27	7	白褐色			
12-25 D 区 土器	土器	かわらけ	(70)	(23)	7	白褐色				
12-26 30-3 土器	土器	土器	(4)	(11)	4	4	白色	中国	内縫有 底板有。不明。内面絞模	
12-27 30-3 土器	土器	土器	(4)	(11)	3	3	白色	中国		
12-28 30-3 土器	土器	土器	45	7	灰白色	波状見	内縫有 底板有			
12-28 C 区 収付	收付	收付	46	8	3	3	白色	中国	近代	
12-29 C 区 収付	收付	收付	5	5	白色	肥前	外縁付付			
12-30 C 区 収付	收付	收付	5	5	白色	肥前	天保。内縫部分に漆のような特有物			
12-31 C 区 五貫土器	五貫土器	火鉢か?	20	5	白褐色	肥前	外縫縫合			
12-32 D 区 徐付	徐付	土瓶	(56)	(12)	4	4	白色	肥前	内縫縫合。蓋に目直縫	
12-33 D 区 徐付	徐付	土瓶	(140)	4	4	白色	肥前	16C後半	外・管状縫 内・袋縫	
12-34 D 区 3 手付	手付	手付	(54)	(43)	8	8	白褐色	外縫縫合。蓋はげ。手付缺		
14-8 C 区 瓷器	瓦屋	瓦屋	41	41	9	9	白色	透視		
14-9 S X34 土器品	土人形	土人形	6	6	白色					
14-10 S X34 土器品	土人形	土人形	64	39	白褐色	動に消化液を含む				

表4 石製品観察表

遺物番号	出土点	縦・横	厚さ	口径	縁厚	石色	備考
13-1 S D 3 2 はし	278	7	ケズリ	10	5	青緑色	内縫縫合
13-2 S D 3 2 はし	271	7	ケズリ	10	5	青緑色	平たい
13-3 S D 3 不明	76	60	50	六面加工上。下。面ケズリ有			
13-4 S D 3 陶	7	7	内凹黒澤				
13-5 S D 3 陶	(120)	65	(21)	4	4	白色	
13-6 S D 3 陶	(105)	(70)	(11)	3	3	白色	
13-7 S D 3 陶	120	120	23	4	4	白色	
13-8 S D 40 陶	100	100	20	4	4	白色	底板一重黒
13-9 S D 45 陶	228	196	28	20	20	内一重黒	外一加厚
13-10 S X30 陶	117	54	(34)	5	5	全面黒澤	底板一重
13-11 S D 48 陶	246	90	9	9	9		
13-12 S X30 陶鋼毛	120	84	10	10	10	一部削付着	
13-13 S X30 陶	105	138	23	6	6	ケズリ。元品	
13-14 S D 3 陶	105	68	22	6	6	ケズリ。	
13-15 S D 3 陶	65	49	49	49	49	ケズリ。	
13-16 S D 48 陶	246	29	3	3	3	ケズリ。木綿状の本札	
13-17 S D 48 陶	592	104	103	104	104	コナフ裏	
13-18 S D 48 陶	798	92	85	75	75	マツ属	
13-19 B 区 陶	800	102	95	95	95	ケズリ。マツ属	
13-20 S X30 不明	(96)	75	14				
13-21 S X34 陶	13	13	13	13	13	内一重黒。外一加厚。	陶化
13-22 S X34 陶	142	60	(67)	6	6	内一重黒	
13-23 S X34 陶	90	90	90	90	90	内一重黒	
13-24 B 区 陶	(101)	5	(2)	4	4	内一重黒。外一加厚。内縫有	

表5 銭貨観察表

遺物番号	出土点	名	年	初期	直径	厚さ	質	備考
14-1 S D 3 未確定	100	100	100	100	100	5.5	1.5	青緑色
14-2 S D 3 未確定	278	278	278	278	278	5.5	1.5	青緑色
14-3 S K44 陶	61	61	61	61	61	4.9	8	灰褐色
14-4 S X34 石器	160	160	160	160	160	20.0	2.5	青緑色 内縫接縫
14-5 S X34 不明	20	20	20	20	20	4	青緑色	明治以降?
14-6 不明	琥珀石	100	5	5	2	青緑色	底板。中板。	
14-7 C 区 琥珀石	135	135	135	135	135	5.7	0.7	青緑色 砂質。
								無限の暗影

ふりがな	書名	副書名	巻次	シリーズ名	シリーズ番号	編著者名	編集機関	所在地	市町村	遺跡番号	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積(m ²)	調査原因
よねざわじょうあとだいにじょうこうこくしょ	米沢城跡第2次調査報告書		第89集	山形県埋蔵文化財センター調査報告書	89集	齋藤健 湊谷純子	財団法人山形県埋蔵文化財センター	〒9999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号 TEL 023-672-5301								県道米沢 猪苗代線 3・4・4 窪田・諸 仏線改良 工事

種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
城館跡	中世	堀溝	1 土器・陶器(かわらけ、溝跡、土坑) (16~19世紀)	中世末から近世にかけての溝跡と近世二の丸外堀の一部を検出。近世の金箱付着
		土坑	12 入陶磁器	
			木製品(漆器椀・はし・蓋) 石製品(砥石・鉢) 金属製品(古銭)	(総出土箱数: 24)

表2 土器・陶磁器観察表(2)

通号	出土地點	種別	器種	口径	底径	器高	厚	動土色	制作地	備考
12-3	S X34	土器品	壺			39	10	白褐色	外縁に傷付有	
12-4	S X34	瓦質土器	火鉢	(284)	(138)	68	10	赤褐色	上部底付有。穿孔外から内へ	
12-5	S X34	瓦質土器	火鉢			11	10	褐色	底部に脚痕有	
12-6	S X34	陶器	壺	(104)	(43)	7	5	灰褐色	表面?	灰色物。底付有?
12-7	S X34	陶器	不明	(156)		7	5	深褐色	織形	
12-8	S X34	陶器	蒸入れ?	(100)		3	3	青褐色		
12-9	S X34	陶器	鉢	(157)	(56)	69	8	灰褐色	横津16C末	船底跡。高台無。内部鉄絲
12-10	S X34	陶器	土瓶	(53)	(33)	4	3	青褐色	相馬系	外縁付け。外面下部から底部に輪無
12-11	S X34	陶器	瓶			6	5	黑褐色	趙前	口縁部に灰褐色
12-12	S X34	陶器	小壺			4	3	灰褐色	青灰色帶	
12-13	S X34	陶器	風呂?			8	5	灰褐色	足跡。一部削りげあり	
12-14	S X34	陶器	鉢			19	5	灰褐色	鉄錆。胎土に研磨	
12-15	S X34	陶器	鉢	(210)		5	5	黑褐色	底付有。内白焼物	
12-16	S X34	陶器	壺	(174)		5	5	黑褐色	皮膚	ナマコ釉
12-17	S X34	陶器	鉢	(120)	(70)	11	5	灰褐色	内部塗有。灰褐色。完器系	
12-18	S X34	陶器	壺	(130)		14	8	灰褐色	倒置16C後半	
12-19	S P50	土壤質土器	始塔	(184)		51	14	灰白色		鐵器
12-20	S X34	陶器	瓶			9	5	赤褐色	スリ召焼	
12-21	S P59	土壤質土器	理瓶			20	12	灰褐色	手づくね。内部に付着物有	
12-22	S P59	真測系	瓶			9	5	黑褐色	外タクシ。音無し	
12-23	B K	土壤質土器	かわらけ	(64)	(92)	27	7	青褐色	内面下地塗りの上に金箔	
12-24	39-3	土壤質土器	かわらけ	(70)	(43)	7	7	青褐色		
12-25	39-3	陶付	瓶	(4)	(11)	4	4	白色	中国	内面に紋様有
12-26	39-3	陶付	瓶			3	3	白色	中国	底付有。不明。内面紋様
12-27	B K	陶付	鉢			45	7	灰白色	波佐見	内面花紋
12-28	C K	陶付	仏頭瓶	(66)	49	6	3	白色	近代	外墨阿列紋
12-29	C K	陶付	鉢			5	5	灰褐色	肥前	外墨花紋
12-30	40-3	陶器	壺			6	5	灰褐色	瀬戸大窯期	天目。無端部分に漆のような付着物
12-31	C K	瓦質土器	火鉢?			20	5	赤褐色		外3寸キ
12-32	D K	陶付	壺			4	4	白色	肥前	内面隨燒。表に目板有
12-33	D K	陶付	壺	(140)		4	4	白色	肥前10C後半	另一段草紋。内一型紙調り
12-34	45-3	陶付	壺			8	8	灰褐色	波佐見	外墨紋有。物はげ有。船錫の底有
14-8	C K	土製品	土人形			9	9	白色		透明明瞭
14-9	S X34	土製品	土人形			6	6	赤褐色		
14-10	S X34	土製品	不明			54	39	赤褐色	胎土に炭化粒を含む	

表3 木製品観察表

通号	出土地點	長さ	幅	厚さ	種類	材質	形状	類似	類似	長径	厚	色	考				
13-1	S D 2	はし	278		7	ケズリ				14-1	S T 45	鐵石	120	88	赤褐色	門形被熱	
13-2	S D 2	はし	271		4	ケズリ。平たい				14-2	S K 30	不明	29	14	青緑色		
13-3	S D 3	不明	75	60	50	穴面上に。下面ケズリ有				14-3	S K 44	鐵	61	40	8	灰褐色	被熱
13-4	S D 3	瓶			7	内外黒漆				14-4	S X 34	火鉢	160	80	25	赤褐色	内面漆乾
13-5	S D 3	瓶	(120)	65	(21)	4	白木			14-5	S X 34	不明	20	20	4	赤褐色	明治以降?
13-6	S D 3	瓶	(105)	(70)	(11)	3	白木			14-6	S 明	鐵石	100	5	2	青緑色	被熱石。中風
13-7	S D 3	容器	120	130	23	4	全画面黒漆			14-7	C 16	鐵石	135	73	57	青緑色	砂摩。粗粒。胎1cmの研ぎ直
13-8	S D 48	瓶	(121)	(72)	(43)	6	内外一朱漆	底部「一」朱漆									
13-9	S D 48	瓶	228	196	28	20	全画面黒漆	底部「一」朱漆									
13-10	S K 30	瓶	117	54	(34)	5	全画面黒漆。底部「一」朱漆										
13-11	S D 48	瓶	246	90	9	極目											
13-12	S K 30	漆刷毛	120	84	10	一部漆付箋											
13-13	S K 30	脱糞水	138	23	6	ケズリ。完形品											
13-14	S D 3	枕	1066	68		ケズリ。ヒノキ											
13-15	S D 3	枕	692	46	49	ケズリ。ヒノキ											
13-16	S D 48	乳状木	246	23	3	ケズリ。木柄状の木化											
13-17	S D 48	枕	592	104	103	コナラ属											
13-18	S D 48	枕	798	95	85	マツ属											
13-19	B K	枕	800	102	96	ケズリ。マツ属											
13-20	S K 30	不明	(98)	75	14												
13-21	S X 34	瓶	137		13	内一朱漆	外一黒漆。底部「一」朱漆										
13-22	S X 34	瓶	142	60	(57)	6	内外一朱漆										
13-23	S X 36	曲物	90	93	8	極目											
13-24	B K	瓶	(10)	5	(2)	4	内一朱漆	外一黒漆。内部付物									

表4 石製品観察表

通号	出土地點	器種	長径	厚	色	考
14-1	S T 45	鐵石	120	88	赤褐色	門形被熱
14-2	S K 30	不明	29	14	青緑色	
14-3	S K 44	鐵	61	40	8	灰褐色
14-4	S X 34	火鉢	160	80	25	赤褐色
14-5	S X 34	不明	20	20	4	赤褐色
14-6	S 明	鐵石	100	5	2	青緑色
14-7	C 16	鐵石	135	73	57	青緑色

表5 錢貨観察表

通号	出土地點	銘	年	直径	厚	重	備考
14-11	S D 3	永慶通宝	1408	23.8	5.5	1.5	
14-12	S D 3	永慶通宝	1408	24.4	5.5	1.2	
14-13	S D 3	永慶通宝	1408	25.0	5.2	1.4	
14-14	S D 3	永慶通宝	1408	24.1	6.2	1.5	
14-15	S D 3	永慶通宝	1408	24.4	5.5	1.3	
14-16	S D 3	永慶通宝	1408	24.3	5.8	1.4	
14-17	S D 3	永慶通宝	1408	24.3	5.8	1.2	
14-18	S D 3	永慶通宝	1408	24.3	5.8	1.1	
14-19	S D 3	洪武通宝	1368	22.0	5.0	1.6	
14-20	S D 48	寛永通宝	1636	24.3	5.3	1.3	古寛永
14-21	S D 48	寛永通宝	1636	23.0	5.8	1.4	古寛永
14-22	S D 48	寛永通宝	1697	21.3	6.8	0.7	三閒寛永
14-23	S K 30	萬曆通宝	1017	23.5	6.8	1.1	萬名不辨
14-24	S K 30	熙朝光宝	1068	24.3	7.3	0.8	
14-25	S K 30	永樂通宝	1408	24.3	5.8	1.3	
14-26	S K 30	嘉慶通宝	1739	24.0	6.3	1.5	嘉一文銅
14-27	S K 30	嘉慶通宝	1739	23.5	5.7	1.3	嘉一文銅。重額有
14-28	S D 7	洪武通宝	1368	23.8	5.5	1.6	青方面「北平」刻有
14-29	S X 34	永樂通宝	1408	29.8	6.0	1.3	
14-30	S P 27	天祐通宝	1017	23.3	5.8	1.2	割れ垂み有
14-31	29-3G	寛永通宝	1636	24.0	5.5	1.5	古寛永。S D 48上側

図 版



B区全景（手前西）



C区全景（手前西）



A区全景（南から）



B区遺構検出状況（南から）



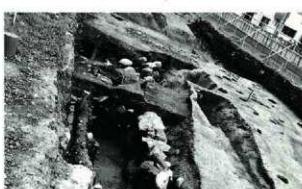
SD 3完掘状況（南から）



SK 1完掘状況（東から）



SK 30完掘状況（北から）



SD 48基底（南から）



SD 48基底（北から）



山形県埋蔵文化財センター調査報告書第89集

米沢城跡第2次発掘調査報告書

2001年3月31日発行

発行 財團法人 山形県埋蔵文化財センター

〒999-3161

山形県上山市弁天二丁目15番1号

TEL 023-672-5301

印刷 山形印刷株式会社